

コンプレックス詩集

outlandkarasu

まどろむカラスの黒い夢

都会のまんなか お堀のほとりで
僕はやはり
カラスを脱っせずにいた
ずるがしこくて うすぎたない
そんな彼らに対する共感は たぶん
カラスよりずっと多い人間への好意よりも
ずっと的を射たもののように思われた

そんな僕にも たまには電話がかかってくる
あれは夜だった スターバックスの2階で
OLの下品な会話を傍聴しながら
カビのコロニーみたいな灯火がはびこる
夜を眺めながら
ホワイトチョコモカフラペチーノを僕はすすっていたっけ
ポケットの中で不意に
目を覚ました小鳥みたいに
携帯が震えた
『宗教』
と、1行だけのメモディスプレイには表示されていた

電話の主は友人でもなければ古くもない
仏の功德を高らかに歌い上げ
やがて訪れるだろう天罰の恐ろしさに声を低め
そうして 試行の大切さについて語るのだった
僕はくぐもった声で相槌を打ちながら
細い緑色のストローでクリームの溶け込んだコーヒーをかきまぜながら
ホワイトチョコモカフラペチーノの正しい飲み方についてずっと考えていた

幸運は不条理で
嘲りこそ命の糧だと
冷笑を続けるひとりのカラスに
仏がいったい何の用向きだろう？
9600bpsの電波に乗った
男の言葉は
OLの笑い声に混じって
スポット状の灯火を少しだけ明滅させただけだった

電話のことはさておき
僕も神様をみたことはある――

邪悪なカラスが抱くには
恐ろしく邪悪な悩みを抱いたまま
僕は武蔵国の故郷へ降り立った
すでに地球の影は大地を覆っていて
冷たく澄んだ闇が
旧い家並みのあいだに行き渡っていた
青白い光をまとった月が空のまんなかに昇っていて
月を抱え込むようにして伸びた梢が風を受けていた
風のたびにゆすがる木々の黒い茂みは
遠い夜の海から借りてきたような 波頭の崩れる静かな轟きを
僕の頭上にいつまでも響かせてくれるのだった

たぶん今も忘れていない
神様とともにあった時間には
邪悪も悩みも
悩みの邪悪さも
夜風がどこかにさらってしまい
すべては 始めからありもしなかったことなのだと
そうささやかれた気分になったっけ

ありもしなかったこと
僕はいつも ありもしないということに憧れていた

少し時間をさかのぼって
僕がまだ 風と光に包まれていたころ
包まれていたからこそ その2つの特性に気付かなかつたころ
自転車で 古い城郭を訪ねたことがあった
いかめしい防壁や堀の数々は
年月がその角を丸め
その意志を挫き
あらゆる種子をふりまいて
ついには
静けさと緑で何もかもを占領してみせた

城主が腰を下ろしていたはずの
四角い盆のような形をした本丸でさえ
6本の巨木がたたずんで
そこはすっかり 神様のすみかへと作り変えられていた
頭上高くを覆った木の葉の屋根をすり抜けて
光は躍っていた まだらににじんで 中空に筋道を残して
冬を越えた枯葉を押し分けて
道がまっすぐに伸びていた
もぐら穴をよけながら 僕は足を進め
石柱がたたずむ神殿の奥底で
記された碑文を見上げた
山脈と空気に問いかけるその歌は
何もかもいっさいを夢に返して
すべてはありもしなかったことだと
そう理解した僕自身すらも
ありもしなかった“もの”なのだと
はっきり告げていた
僕は耐えられずに背を向けた
屋根を越えた向こうには光が降り注ぐばかりで
自転車が
巨木に比べるとおもちゃみたいに小さな自転車が
銀色のフレームに太陽を落とし込んでいた

語りかける者は誰もいなくて
僕を誘い込むものも何ひとつなかったけれど
神様はそこにいた
神様は自転車の小ささの中にいた

男はまちがっていた
神仏はいのりのなかにはいない
神仏はありもせず そして
すべてはありもしなかったことだと
僕らが見透かしてしまった時にだけ
小さな後姿をかいま見せるのだった

カラスよりも多い人間の中で
僕は確かに存在していた
存在してしまっていた

きっと僕はとまどっている
自分がいることに
自分に心があることに

信じる人が少なくなって久しいけれど
《いる》ことや《心がある》ことは
厄介な現実だった
僕はときどき悩む
悩むために悩む
僕は問いかける
《いない》ことによって“いる”神様に問いかける

自分の心と現実と
動かしやすいのはどちらだろう
現し世はなべて夢かもしれないけれど
すべての夢はどれも
現し世の変奏曲に過ぎないっていえるのだろうか

ホワイトチョコモカフラペチーノを飲み終えて
僕は席を立った
電話はすでに切れていて
街は静かだった
向こうのほうの 坂の上の
首相官邸のあるあたりに木々の茂みがあって
そこでは 数羽のカラスが眠りにについているに違いなかった
まどろむカラスの夢に溶け入ろうと
誰もいない歩道を 足音を忍ばせて
僕は歩いていった

正義はいずれ表現されねばならぬ

ゆがんだレンズで
店長のまぶたは融けて
ビルに穿たれた
無数の暗い窓からは
一千億の眼がのぞくのさ

ラジオの立てる
断定的な音波
ひどく硬質な文言たちに
店長は融かされていくのさ

誰も見たことのないような
目尻からこめかみへ伸びるしわ
空気をちぎるように
店長は声を発する

新聞はしばらく来んよ
飛行機がビルに突っ込んだ
あっちはもう戦争だよ

戦争

暗闇は骨の味で
断定は亡霊の悲鳴
正義はいずれ
表現されねばならぬ

窓に穿たれた一千億の眼が
店長をのぞきこむのさ
ゆがんだレンズで
店長の皮膚はただれ
記憶は再燃する

死んだブラウン管と同じ黒で
あらゆる窓は埋まっているのさ
極彩色の正義を

塗りつけるのに
うってつけな
眠りこけた
黒いキャンバス

東京にいる誰もまだ
目覚めていない
午前三時半

今という名の病

手段と目的の混ざり合った水平線へ向けて
水上バスが航跡を引くのが見えた
擬古的様式のビルの足元を俺はさまよい
神の巨大な墓標でもあるかのような
そういったビルの 影絵のうごめき
光が切り取る闇と
闇が切り取る光とを
見た
もはや無限の砂山と化した空
あらゆる人間が足跡を刻み
登っていくばかりの空
それが 今という名の病の前景だった

気づけば俺は 夏空の誘惑に負けて
空の色を確かめるために
矛盾を体現せんがために
武蔵野の小さな川のほとりに
立っていた 何も持たずに ひとりきりで
城塞と化した住居の光が
歩くべき1兆マイルの道を描くと
俺は 自分が誰も愛していないことに気づいた
1兆マイルを歩くべきこと
本当の孤独のほとりに立ったことに
恐怖した
五線譜に淡々と音符を記すミニマム・ミュージック
たった2つからなる反復和音のように
足跡だけがずっと伸び行く
それが 今という名の病の背景だった

失われた世紀末

九月の空を切り分ける 団地と団地のはざま

どの部屋の 灰色の窓も 失われた世紀末を 閉じ込めていて 死んだ夏の臭いが たちこめる
そんな 巨大な音叉のはざままで あの振幅は共鳴を始めて 僕の頭蓋という 小さな共鳴胴にも
ある戦慄をもたらすんだ

あの振幅は段々と高まって 世界の裏地から ことばを引き上げる

僕たちが記憶を発明するより ずっと前から響いている 古いことば

僕の皮膚を作り上げたあらゆる意味を 溶かす力を持った 強酸性の 古いことば

ひとりで横になったときの 媒質を抜き取られた宇宙の中ですら あの振幅は 毎夜 駆け抜けていく

誰もいない という存在におびえ そして 意味がない という意味にすがりながら 僕は知る
あの振幅が位相を完全に揃えるとき 世界は滅ぶ

きっと 永久に落下して それか 視点を変えれば 永久に上昇して

僕の頭蓋という 小さな共鳴胴を 僕は懸命に閉ざす

まぶたの下を 波が駆け抜けていくのを感じ 僕の皮膚を ある戦慄が あいまいにする

失われた世紀末を 閉じ込めた 無音の部屋で 僕は目を開く

恐る恐ると そうでなければ 耐え切れずに

電灯のスイッチに結んだひもが 鼻のまっすぐ上で ぼんやり光り まるで命綱みたいに 垂れていた

テレビの下品な笑い声が 壁の向こう側から染み込んで 宇宙をもういちど 媒質で満たし直して

冷蔵庫の扉を閉じた 母さんの足音が 僕の頭蓋という 小さな共鳴胴を そっと塞ぐ

僕の目には 知らないうちに 涙があふれている

僕は世界を滅ぼすかもしれないんだ

母さん

魔王

誰か

僕を殺しにくる勇者はいないのか

神聖な暗殺者よ

ここにはおまえが捨て置けない

時空のねじれがある

次元のゆがみがある

世界の裏側からひびを入れ

黒い光を射し込ます

人間の法則への

裏切りがある

誰かいないのか

真実と愛を体現し

美と健全を兼ね備えた

まったき姿の人間は

おまえが清らかな切っ先で

暗黒のはらわたをえぐるのを

僕は想像する

僕は待ち望む

そのときおまえは歌えばいい

永遠の正義と真実の歌を

僕もまたそれに

皮肉な断末の笑みで加わることだろう

どうか僕に教えて欲しい

真実と愛を

美と健全を

人間のまったき姿を

人間の法則を

歌うことのできる

永遠の正義と真実を

どうか教えてほしい

それらを一瞬でも目にすることが叶うなら

自分の血潮の中で僕は叫ぼう

「止まれ、お前はいかにも美しい」と

誰かいないのか
僕を殺しにくる勇者は
ここにはねじれがある
ゆがみがある
黒い光があり そして
裏切りがある
誰かいないのか
誰か.....

純粹であることは異端である

君はすこし読心術が過ぎるのだ
人の心に本当のもの（笑）なぞ求めるな
あらゆる人間関係にはすべて
茶番の要素が含まれている
他人にはこうだろうと思う通りを思わせよ
こうあれよと願う通りにあらしめよ
それで大体うまくいく
本当のもの（笑）なぞどうでもいい
本当のもの（笑）なぞ誰も求めていやしない

純粹であることは異端なのだ
街角で街頭で交差点で駅でオフィスで工場で会議室で
今日も盛んに異端審問が催されている
指摘され慌てて否定するのは純粹だ
指摘され考え込むのは良く訓練された純粹だ
指摘され頷くものは腰の据わった純粹だ

純粹は撲滅されねばならぬ
なぜなら《本当》こそ人類の敵であるからだ
いつからか我々は《本当》を敵に回してしまったのだ
《本当》を解体し分解し還元し分析し計量し
消毒し漂白し連結し縫合し編集し投稿し複写しなければならぬ
さもなくば死だ
本当の自分（笑）
本当の気持ち（笑）
どれも人を殺す凶器なのだ
それらもやはり解体し分解し還元し分析し計量し
消毒し漂白し連結し縫合し編集し投稿し複写しなければならぬ

本当の自分（笑）それを押し付けられたとき
人間は圧死する
本当の気持ち（笑）それが伝染を始めれば
コミュニティは虐殺される
本当の自分（笑）
本当の気持ち（笑）
そんなものは排泄物のように

君自身がこっそりと始末をつけるべきものなのだ
それらを人に押し付けようとするものは
撲滅すべき純粋だ

本当のもの（笑）

本当のもの（笑）はいつだって心の内側にしか
ありえなかった

君が行動し君が打ち立てる

決して完成しない何ものかの内側にしか
ありえなかった

心と心の間には本当のもの（笑）なぞどこにも見当たらず

それでも本当のもの（笑）を見たと思う瞬間が稀に訪れる

もし君がそこで立ち止まってしまえば

君はやはり撲滅すべき純粋だと言わざるを得ない

恐れるがいい撲滅を

異端審問を

解体を分解を還元を分析を計量を

消毒を漂白を連結を縫合を編集を投稿を複写を

恐れるがいい

《本当》を見てしまった純粋な者よ

全世界が君の前に立ちはだかるのだ

全世界を滅ぼしてみせろ！

君の《本当》で

溶解

限りなく海に近い
ねばつく川の上
鉄の橋が低く伸び
夏の終りの腐臭がただよう
ここはずいぶん静かだな

ただ あちこちの高いところで
灯火がまぶしく ビルの稜線を描いている
それだけが恐ろしい
垂直の稜線 無情な論理の断崖
僕は論理が恐ろしい 僕の論理は
首の辺りの骨から生えて
頭の後ろに突き出して 一对の
黒い翼の止まり木となる
時間の矢を追いかけて 立ち上がり
走り よじのぼり ドアを抜け
ふと足元を見下ろせば
自分の影を踏んづけた そんな時に
黒い翼は舞い降りてくる
僕は論理が恐ろしい
僕は黒い翼が恐ろしい

僕は僕が恐ろしい
触れるものぜんぶ僕は壊してしまうから
震える指が
ささやかな和音を奏でる弦を切断し
半開きの眼が
街の空をかすめた流星群を地に落とし
磨り減った靴が
切り出した水晶玉を粉にした
触れるものぜんぶ
僕は壊してしまう だけど
ただひとつ
壊せないでいる
自分だけは
壊せないでいる

壊せないでいる
壊せないでいる

時間の矢など落ちてしまえ
そうして 夜の空で渦を巻け
僕はあまりに垂直を生きすぎた
論理の断崖 黒い翼の止まり木を
生きすぎた
空と海のあいだのあいまいな境界線へ
あの世界の間隙に向かって
垂直の稜線などねじ込んでしまえ
それから 懐かしい水平線に身を横たえよう
時が雨となって降り注ぎ
僕をゆっくり溶かしてくれることを
何かに祈りながら

ああ
あちこちの高いところで
灯火がまぶしく ビルの稜線を描いている
だけど ここはずいぶん静かだな
夏の終りの腐臭がただよい
鉄の橋が低く伸びる
限りなく海に近い
ねばつく川の上

トリックスター

干からびた二本の足で
不器用にひょこひょこ歩く
やり場のない君の思いやりが
クソをひねり散らし
女の 暗いところを打った！
ああ 放逐され 押し出ていく
トリックスター
見るもの
触れるもの
ぜんぶ壊していく
君はトリックスター！
どこへ行けば良いと言うの？

醜い鼻と口を
黒いつばさの下に隠して話す
やり場のない君のほほえみが
美田の畝に穴をうがち
女神を 引きこもらせた！
ああ 羽ばたき 逃げていく
トリックスター
関わる人
居場所
ぜんぶ失くしていく
君はトリックスター！
どこにいれば良いと言うの？

自分を滅ぼせる者
罰せられる人
を求めていた
自分を消化できる国
消失できる場所
を求めていた
トリックスター！
君はまだ探し続けるつもりだね？
細く醜悪な喉笛と胸
小さく下卑た頭と貧弱な手足

濁った両目と不気味な両手
つまり 自分自身を抱えて？
ああ 駆けていく
飛んでいく
去っていく

曲がった爪を研ぎながら
次に向かう陸を探す
やり場のない君の愛情が
空を二つに分割し
思い出から 未来を隔離した！
ああ 怯え 震えだす
トリックスター
訪れるもの
現れるもの
それでもぜんぶ平らげていく
君はトリックスター！
どこで死ねば良いと言うの？

自分の殻に閉じこもっていた男の話

「あなたは自分の殻に閉じこもりすぎている」

ある女性にそう言われた。

ショックだった。

僕は自分の身体を見下ろした。

丸く固い表面。

一分の隙もない、滑らかで捉えどころのない皮膚。

無機質で、均一で、触ると冷たかった。

これじゃいけないと思った。

こんだから、僕は周囲と打ち解けられないし、誰からも相手にされないのだ。

僕は殻を破り、本当の自分をさらけ出す決心をした。

僕は金槌を手にとった。そして、自分の殻を思い切り叩いた。

激痛が走り、目の前で何かがピカピカ光った。

それから、鈍い痛みが腹の中でゆっくりととぐろを巻いた。

殻は歪み、ひびが入り、赤や黄色の血が隙間からにじみ出てきた。

僕は金やすりを手にとった。そして、自分の殻を削った。

固い表面が粉となって落ちて、あるところで柔らかいものに触れた。

その瞬間に僕は甲高い声を上げた。

金やすりから脳天へ、背骨に沿って痛みが走り抜けた。

思わず手を止めると、焼け付くような熱が、削りとった辺りから広がった。

綿のような血と肉が、金やすりの下から現われた。

僕はノギリを手にとった――。

僕は――。

鏡の向こうに、見たこともないグロテスクなものが現われた。

握りつぶされたように歪み、全体から血や体液を滴らせ、

立っているのも危うい姿だった。

僕ですらその姿から目をそらしたくなった。

だけど仕方がない。

そう僕は思った。

これが本当の僕、殻に閉じこもっていない本来の僕なのだから。
アドバイスをくれた女性に僕は会いに行った。

見てください。

僕はもう殻に閉じこもっていませんよ。

これが本当の僕です。

よく見てください。

赤くなって熱を帯びています。

ほら、血も出ています。

ここなんか骨まで見えてます。

どうですか？

これで僕のことが良く分かったでしょう。

僕はもう殻になんか閉じこもっていません。

僕を受け入れてくれますか？

女性は目をそむけて逃げていった。

誰も彼も僕から目をそむけ、離れていった。

僕は独りになった。

前よりずっと、独りになった。

血はとめどなく流れ、足元には赤い水たまりができた。

やがて冬が訪れた。

ひび割れた殻の間に冷気は容赦なく入り込んだ。

乾いた傷口がひりひりと傷んでいた。

僕は道端で汚れた毛皮を拾った。

何の動物だかも分からない、黒くて大きな毛皮だった。

僕はそれを身にまとった。

傷口は塞がり、寒さも耐えやすくなった。

しばらく歩くと、もう一枚毛皮を見つけた。

僕はそれも身にまとった。

冷気はより遠ざかって、傷の痛みも徐々に引いていった。

歩き続けているうちに、手袋をなくした子供が通りかかった。

子供は、赤くなった両手を僕の毛皮に突っ込んだ。

あったかい、と子供は微笑んだ。
親が叱りに来ると子供は慌てて僕から離れた。

僕は毛皮を探して歩いた。
何枚も何枚も、見つけるたびに拾い、身体に巻きつけていった。
そのうち身にまといきれなくなって、
上等のものが見つかったら汚いものを捨てる事にした。
いつのまにか僕は、
白くてふさふさしたきれいな毛皮で覆われていた。

すれ違うたくさんの人が足を留めるようになった。
何人かは僕の毛皮を撫で、頬を付け、身体を埋めていくようになった。
あまりに居心地がいいのか、
毛皮に埋もれたままずっと僕にくっついてくる人も現われた。
僕はもう、孤独ではなかった。

毛皮はあまりにも厚くなって、
もう固い殻を見ることも触れることもできなかった。
僕は毎晩、自分の身体をまさぐって殻や傷跡を探そうとする。
だけど、それらはもうどこにも見つからなかった。
僕の殻はどこへ行ってしまったのだろう。
本当に消えてしまったのか。
身体はどこかにまだ残っているのか。

消えてしまったとしたら悲しいことなのか。
残っていたとしたら不気味なことなのか。
僕にはわからない。
ただ、分かったと思えることが一つあった。

「あなたは自分の殻に閉じこもりすぎている」

それは、僕が裸ではない、という意味じゃなくて、
むしろ、殻が見えるほど裸でいてはいけない、
というアドバイスだったのだ。

もうやめよう

もうやめよう

人に甘えるの

もうやめよう

愛されたいと思うこと

もうやめよう

報われたいと願うこと

もうやめよう

認めて欲しいと

人前で小さく呟くの

もうやめよう

お節介を焼いて

人に好かれようとするの

もうやめよう

役に立てば愛される

という思い込み

もうやめよう

誰かが思ったとおりでないときに

裏切られたと感じるの

もうやめよう

愛するのに資格が要するという

現実から目を逸らしているの

もうやめよう

落ちた小銭を見るように

他人がこぼした嫌悪を目で追うの

もうやめよう

誰も喜ばない本当のこと

胸の奥から引きずり出すの

もうやめよう

片思い

もうやめよう

自己憐憫

もうやめよう

何もかもをもうやめて

そうして 世間と自分を繋ぐ鎖を断ち切って

漕ぎ出す海はサルガッソー

今まで多くの船が潮に流され
どうしようもなくさまよいこんで
幽霊船となって出てきた場所だ
陸(おか)の連中が目をそむけ
声をひそめる闇の領域 未知の海域
だからこそ僕は行かねばならない
あの静かな暗い渦のまんなかへ
何も起こらない粘つく海を中心へ
僕は行かねばならない
誰も知らない向こうの岸へ着くために
そして 闇を光とするために

少年の死

砂岩が無限に打ち寄せて
森は終わり
冷酷な月がはじまった
錆付いた天球にかけられた
自殺念慮の信号灯が
われわれの足跡を照らし出し
おまえの血もまた立ちどまる
どこまでも沈む
永遠の深海底
音のない砂の底

おまえはおまえの死をしんだ
目をつぶされ
耳をとざされ
声をころされて
おまえはおまえの死をしんでいた
鳴き声ひとつ上げられない
生煮えの眼球
ねじれた体節
流れ出した血は
故郷への道しるべを森に刻んだ

おまえが誰に殺されたのか
わたしにはわからない
それは
嘘と逃亡が得意な雌豹の
無遠慮な流し目であったか
あるいは
不器用なわたしの無意識が放った
流れ弾であったか
それとも
おまえ自身によるさいごの
私有のこころみであったのか
わたしにはまだ わからない

血の枯れ果てたおまえを

わたしはここに埋めていく
ただひとつ 胸に隠されていた
小さな爆弾だけをひきうけて
自殺念慮の信号灯が
おまえの青い頬を染めぬいた
暗い砂漠の波打ち際が
おまえのからだを折り曲げた

何を破壊するべきかも知らぬまま
どこまでもおまえは沈んでいくだろう
永遠の深海底
音のない砂の底

骨色の道を歩いた

故郷にかえる道すら
骨色の道を歩いた
自分の心の
捨て場をさがして

乾いた荒畑が人影もなくつづく
素焼の土管ばかりいくつも横たわり
墓地のようだった
傾いた陽で空は焦げていた
鳶の翼が長い影をおとし
背中を圧す風にきづく
小止みないつめたい風に身震いする

愛することはむずかしい
愛されることよりずっと
その現実打ちのめされて
素焼の土管たちは群れ
死んでいた
土ぼこりに空が赤くにごると
犬の声
誰かを呼ぶ不安げな声
それから
暗渠をながれる水の音がきこえた
最初の星が空で光りはじめた

ここに井戸を掘るべきだ

もしほんとうに
星の光を見つめたいなら
なるべく深く
井戸を掘るべきだ
極東のある島国で
学者たちが
星々の小さなうぶごえを聞くために
鉱山の底へ井戸を掘った
一〇〇〇メートル

それから
世界中の学者たちが
星々の奇妙なおたけびを聞くために
南極の氷の底へ井戸を掘った
二四〇〇メートル
鉱山で地の底に向かって
南極で氷の底に向かって
彼らは耳を澄ました

ここに井戸を掘るべきだ

あまりに微かな
君の心のささやきを聞くために
一〇〇〇メートル
二四〇〇メートル
それを超える
深さ
寒さ
静けさ
孤独
闇
すべて
必要だから

最初の星が空で光る
暗渠をながれる水の音をやぶり
誰かを呼ぶ不安げな声
犬の声
それから
傾いた陽が藍色のおおきな陰を落とし
鳶の長い翼が山へおちていく
素焼の土管たちは夜闇にとけて
背中に取り残されたのは
小止みないつめたい風だけ

故郷にかえる道すがら
骨色の道を歩いた

自分の心の
捨て場をさがして